令和４年度学校関係者評価委員会議事録

日　時　：令和４年３月８日（水）　時間 10：00～11：00
出席者　：鹿屋市立鹿屋看護専門学校　　副校長　馬場みさ子
独立行政法人国立病院機構鹿児島医療センター　　看護部長　村田淳子
公益社団法人鹿児島県看護協会　　教育部長　楕松由美子
公益財団法人慈愛会　　統括看護部長兼看護部支援室長　木佐貫涼子(web 参加)
看護学校：深野副学校長、山田教育主事（書記)、大野教育主事

１．令和４年度看護学校重点目標の評価

1)教育評価を活用した学習支援

・6 つの目標を掲げ取り組んだ。

・「学年の指導目標やコロナによる実習経験差を考慮した形成的評価を行い、個別性を重視した支援を行う。」については、令和 3 年度の老年看護学実習において、臨地実習ができた学生と学内実習のみとなった学生の経験差に伴う老年観の特徴について研究的に分析した。その結果、臨地実習群は実際に受け持った患者を理解し援助することで捉えた老年観、学内実習群は加齢や健康障害に関する身体的変化を捉えた老年観となっている特徴があった。また、看護実践能力についても比較分析した結果、「援助的関係性の形成」において臨地実習群のスコアが有意に高い結果であり、他の項目では両群に有意差はみられなかった。3 年次の領域実習がすべて終了した段階の看護実践能力も比較した結果、すべての項目において両群に有意差はみられなかった。このように、データを用いて学内実習での課題を明確にして今年度の学内実習に活用したことは良かったと考える。

・「教員と実習指導者との連携を図り学生の状況にあった指導を実施する。」については、指導者会議の学習会のサイトを作成し、指導者会議メンバー以外の病棟スタッフも学習会の動画を視聴できる環境を整えた。年度末に取っていたアンケートも学習会ごとに web 上で回答する方法をとり、その後の企画等に活かすことができた。

2)教員のキャリアに応じた教育力の育成

・「国立病院機構のキャリア・フィールドに対応した研修・研究の推進」については、副学校長や教育主事も研究活動に取り組み、モデルを見せることで教員の研究促進を図った。その結果、学会発表、紙上発表合わせて 9 題の発表ができた。今年度は倫理審査委員会への申請も例年より多く、次年度は、閉校まで 1 年であり学会発表のみならず、紙上発表まで挑戦したいと考えている。

・NHO 九州国立看護教育研修会を年 1 回計画している。このような活動を通して引き続き研究推進をしていきたい。

3)国立病院機構就職率(68%)と県内就職率(58%)の向上

・NHO への就職を増やすために、国立病院機構に対する帰属意識の醸成を図るための企画を行った。10 月に開催した学校祭の企画としてシンポジウムを開催した。シンポジストに県内の NHO3 施設で活躍している卒業生を招聘し、「私が輝いている瞬間～看護のやりがい～」をテーマに話してもらった。

・NHO の就職率は全体の 71%、就職者の割合は 77%であった。鹿児島県内の就職率は全体の 50%、就職者の割合は 55%であり、昨年度より減少した。今後も継続して高い就職率を目指したい。

２．自己点検・自己評価

・昨年度、今年度の中間評価からすると全体的に評価は上がっている。

・「Ⅲ教育課程評価」については、学生の学習支援や研究指導の場所が確保できていない点があったため、会議室を開放して学生指導の場所を確保した。また、教員が授業準備のための時間を取れる体制が整えられていない点については、授業時間の減少により準備時間は例年と比較し確保されていた。

・「Ⅳ教授・学習評価過程」については、学生への資料提供が講師開始直前になることがあり、Google Form に講師資料のフォルダを作成して対応していくことにする。また、シミュレーション教育の科目マトリックスの作成に取り組んだ。

・「Ⅴ経営・管理過程」については、教員の実務研修を推奨し、学生がカウンセリングを受けやすいようにカウンセリング場所を変更し環境を整備した。また、チュータ制を導入し、年間を通して進学、就職、学習支援等を行ってきた。

・「Ⅳ卒業・就職」については、各学年の満足度調査を中間と最終の２回実施した。また、科目試験の結果も適宜把握し卒業時の到達状況も調査して把握した。看護技術については、各領域実習後に技術経験率を評価した。しかし、卒業生の就職後の状況を把握し分析する仕組みがなく課題である。次年度は卒業生にインタビューするなどして把握していく。

・「Ⅷ地域社会・国際交流」については、感染症の関係で、組織的な地域貢献や地域の特徴を実際に体験し学習活動に活用するなど様々な計画ができなかった。

・以上を踏まえ、３点の課題を掲げ、次年度取り組んでいきたい。

1) リモート講義になる際の、講義開始までの準備性に課題が残った。次年度は、グーグルドライブに講義資料のフォルダを作成し、学生に事前にリンクを知らせておくことで円滑なリモート講義となるようにする。

2) 卒業生の就業後の状況を分析し、課題点や改善点を教育体制に生かしていくことが課題である。具体的方法として、卒業生を看護研究発表会に招待し、本校での学びを臨床でどのように生かしているか卒業生へのインタビューを通して教育評価の機会とすることや、在校生との交流の場を企画していく。

3) コロナ禍により地域社会との交流が減少したが、次年度より感染症法での位置づけが変更されるため、医療従事者として求められる感染対策の実施をもとに各種ボランティア活動への参加を考えていく。提案として、各実習施設へ参加可能な活動がないかの調査や、国家試験後に実施している学校内環境整備を地域への貢献として地域清掃活動とすることも検討する。

３.評価委員からの意見　　○評価委員　●学校

（馬場評価委員）

○地域交流については当校もコロナ禍の影響を受けほとんどできなかった。国際交流については、当校も外国人からの問い合わせもあり、何らかの準備をしていかないといけないと考えている。

○研究については時間、予算、指導体制と非常に良く取り組んでおり、今後も続けて頂きたい。

○閉校まで一年ではあるが、学内実習となった学生の評価に関する研究もされており、それを今後の教育に反映されることを期待する。

（楠松評価委員）

○3 年間のコロナ禍の影響を臨地実習が受けている。その影響をデータ化して教育に反映していこうとしている点が良い。

○鹿児島県看護協会では卒後１年目の新人看護師の声を拾っている。辞めて行く理由を分析するとコロナ禍で経験が少ないことに起因しているのではないかと思う点がある。シミュレーショ

ンなどの教育方法を用いて工夫しながら現場では教育しているようである。新人看護師が辞めないような取り組みを今後も続けていきたい。

●看護実践能力について１年目の卒業生に調査すると、「倫理」が有意に低下していた。急性期領域で働いている１年目については看護実践能力の自信度は下がらず、慢性期領域では下がっている。慢性期は長期になるので患者の行動変容まで到達させるのは難しく困難感を感じていることが背景にあるのではないかと考えている。ICU・超急性期・外科系で働いている１年目の自信度は高く、外科系混合病棟は低く、混合病棟の性質上覚えることが多いことがその背景にあるのではないかと考えている。卒業生が何を学校で学ばないといけないのか、患者が自宅に帰った後のことまで考えられるような機会を持たせることが必要ではないかと考える。このような反省から次年度は成人看護学実習のセルフマネジメント実習の一部として外来実習をすることとした。

（村田評価委員）

○老年看護学実習の学内実習と臨地実習に行けた学生の学びの差を分析した研究結果を拝見すると、臨地実習ができていない学生、実習ができて実際患者と触れている学生は患者の生活体験までも考察している点から、臨地実習で患者と触れることの重要性を改めて感じた。

○就職してきた新人看護師の学校間格差はそこまで感じていない。

○離職につながる人が最近は出ていない。勤務先の病棟等は関係のないベテランの人を当てて相談する場所・機会を設けている。離職が出ていないということはその成果かもしれない。病棟では明るく振舞って悩みとか聞かれないが相談ではつらい体験を話している。このような相談する部屋を設け、辛さをはかせることで何とか今まで来ている。

○学校側が卒業生から意見を聞き学校側にフィードバックする機会を看護部としても設けるべきだったと思った。来年度は、在校生と臨床の交流ができる機会を作っていきたい。次年度は 1 学年だけなので、卒業生と交流させる場を持ったら良いと思う。

●8 割ぐらいは臨地実習はできている。それでも、学びの差は出ていた。

○急性期病院は問題が顕在化しているので見えやすいのでできた気になっているのではないか。慢性期は生活背景や潜在的な問題をどこまで理解できるかが課題となる。倫理はがん系の病棟のレポートは読み甲斐がある。ICU などの急性期病棟は抑制などしか目がいかない。これは 1 年目に限ったことではないがもう少し深堀させないといけないと感じている。

●もともと難しいことなのか、当校の卒業生の問題なのか分析する必要がある。自信度が高いというのも良いことではない。

（木佐貫評価委員）

○自己点検自己評価の評価も全体的に上がっており良いと感じた。

○コロナの影響を受けた学生たちであったが、データで示していただいた研究報告にあったように臨床体験することが重要であるということを再確認できた。2 週間であってもこんなに差が出てくるんだなあと実感している。

○実習指導者との関係構築、多職種との関り、挨拶など、実習を経験した学生としていない学生で差が出ると思う。臨床もそれを踏まえて新人教育しないといけないと思う。

○卒業生が学校にいって交流することは重要である。臨床にも情報を提供いただきたい。

（深野副学校長より）

貴重なご意見ありがとうございました。次年度は、臨床の卒業生との連携、意見交換をやりながら最後の一年、課題をブラッシュアップしていきたいと思います。本日はありがとうございました。